平成２６年度「重点研究費」研究成果報告書

研究課題	外国人児童の的確な日本語指導につながる発達検査の開発

研究代表者

氏名	所属	職名
松井智子	国際教育センター	教授

研究分担者

氏名	所属	職名

【研究成果の概要】　（文字の大きさ 9 ポイント・字数 800 字～1600 字程度）

１．静岡県、愛知県などの日系外国人集住地区に住むブラジル人幼児の母語と社会性の発達を調べるために以下の 3 種類の課題を作成した。

・Peabody Picture Vocabulary Test (PPVT), Fourth Edition のポルトガル語版
ブラジル人幼児の母語であるポルトガル語の語彙理解力を見るために、英語の語彙検査である PPVT をもとにポルトガル語バージョンを作成し、それを用いた。ポルトガル語バージョンを作成するにあたり、英語がわかるブラジル人（ポルトガル語の母語話者）にまず英語の語彙をポルトガル語に翻訳してもらった。さらにそのポルトガル語訳を別の英語のわかるブラジル人（ポルトガル語話者）に逆翻訳してもらった。その結果、ずれがあった場合は、最も適した訳語を合議の上、選択した。できあがったポルトガル語バージョンは、ブラジルの生活文化と合わないような語彙は含まれていないことを確認した。

・誤補文課題
文法能力の一部である補文構造の理解を見るために、Jill de Villiers らが開発したが開発した英語の誤補文課題（de Villiers & Pyers 2002）の日本語版とポルトガル語版を作成した。画像と音声をデジタル化し、パソコンを使用して実施した。これまでの欧米での研究では、5 歳児はこの誤補文を理解することができることがわかっている（de Villiers 2007）。

・誤信念課題
子どもの心の理論の発達を調べるために広く用いられているのが「誤信念課題」である。パソコンを用いてブラジル人幼児の母語であるポルトガル語で実施できる課題を作成した。

２．日系外国人集住地区に住むブラジル人幼児 26 名と統制群として日本人モノリンガル幼児 25 名を対象に上記の課題を行った。結果は以下のとおりである。

・ブラジル人幼児のポルトガル語の語彙理解は、日本人幼児の日本語の語彙理解力よりも低いことがわかった。
・文法能力の指標となる誤補文課題については、日本人幼児の平均得点はチャンスレベル以上であったが、ブラジル人幼児はチャンスレベルにとどまった。
・心の理論の発達の指標となる誤信念課題の平均得点はブラジル人幼児のほうが有意に低かった。
・さらに誤補文課題と誤信念課題の正答率との間に相関が見られた。

以上の結果から、継承語と社会言語という二言語環境で生まれ育つ子どもの発達においても、モノリンガルの子どもと同様に、言語の発達は心の理論の発達に影響を及ぼすことが明らかになった。

研究成果発表方法

［発表論文名（口頭発表を含む），氏名，学会誌等名（投稿中・投稿予定・執筆中）を記入する。］

※本経費を用いて、報告書（冊子等）を作成した場合には、本様式とともに1部を提出すること。
なお、提出された報告書は教育実践研究推進本部を通じて附属図書館へ寄贈する。

・松井智子・須藤美織子（2014）日本における言語的マイノリティ幼児の言語と社会性の発達.『コミュニケーション障害学』31(2)：90－101.

・松井智子　日本で生まれた言語的マイノリティ幼児の言語と社会性の発達　第8回国際教育センターフォーラム　口頭発表　2015年3月7日